

先輩たちの筆跡

岡田 靖雄

演題の“筆跡”は“ふであと”とよんでいたきたい。この字は普通は“ヒッセキ”とよまれるが、“ヒッセキ”では“筆跡鑑定”というようにつめたい。“ふであと”なら、やわらかで、あるいはその人のお人柄もうかびあがりそうである。

わたしの1月例会報告は、かぞえてみると27回目になる。そこで、自分の仕事のいわば中締めとして今回の報告をおもいたった。呉秀三先生伝や松沢病院史をかこうとして、先輩方の話しをうかがったときから、署名帖に一言かいていただいた。本ができて差し上げにいても、かいていただいた。まえの精神科医療史研究会では先輩の話しをうかがうことが何回もあり、そのときも先輩および参加者におねがいをした。この月例会では何回かシンポジウムを計画し、そのあとの懇談会で署名をいただいた。1979年にはじまったこの署名帖はすでに4冊になっている。今回はこの4冊から、皆さんに比較的なじみがあるとおもわれる方がたの署名をおしめした。といっても、20年前、30年前に当会員の多くがよくしておられた方も、かなりなくなっておられて、今の皆さんにはもうとおいい名になっているだろう。

呉秀三先生および松沢病院の関係で、関根真一（松沢病院副院長から武蔵療養所所長）、村松常雄（松沢病院副院長から国府台病院長、名古屋大学教授、精神衛生研究所所長）、野村章恒（戦争中松沢病院で共産党員の拘禁精神病を研究、慈恵会医科大学客員教授）、三浦芳江（呉先生娘）、齋藤いく代（呉先生娘）、呉章二（呉先生第2男）、鱈崎轍（呉先生が尿毒症で呉内科入院中精神科医局長で幾日間付き添い、東京少年鑑別所所長）、榎田良精（呉先生とともに私宅監置論文をまとめた榎田五郎の甥、東京大学教授〔臨床検査〕）、丹波康頼の子孫でこのときの訪問がきっかけで医心方一千年祭に出席された）、岩生成一（洋学史、学

士院会員）、大島蘭三郎（慶應義塾大学教授、日本医史学会理事長）、大久保利謙（洋学史、大久保利通孫、当時国会図書館憲政資料室におられた）、沼田二郎（洋学史）、前田忠重（呉先生の臨床理念を忠実にうけついでた人、厩橋病院長）、野間祐輔（広島県医師会副会長、岡田が呉先生伝をかくとき広島県を案内してくださった）、青木義作（呉門下、齋藤茂吉の青山脳病院で副院長だった）、箭内健次（洋学史）、木村栄一（呉先生孫、日本医科大学学長）、宗田一（日本医史学会常任理事、京都医史学界の重鎮）、緒方富雄（東京大学教授、緒方洪庵曾孫、小川鼎三先生と同級で、日本医史学会重鎮）、富士川英郎（東京大学教授、ドイツ文学者、富士川游息、日本医史学会理事）、小川鼎三（東京大学教授、順天堂大学教授、日本医史学会理事長、学士院会員）、酒井シヅ（順天堂大学教授、日本医史学会理事長）。

呉茂一先生を偲ぶ会（呉茂一先生は秀三先生息で西洋古典文学者、偲ぶ会は野間氏の提唱で組織され、毎秋にあつまってる）の関係で、久保正彰（東京大学教授、西洋古典文学、学士院長）、杉葉子（映画『青い山脈』主演）、呉忠士（茂一先生息）。

精神科医療史研究会の関係で、伊藤正雄（戦後いちはやく国立肥前療養所で病棟全面開放をおこなった）、吉岡真二（岡田とともに精神科医療史研究会を運営していた）、小林八郎（武蔵療養所医務課長、生活療法を提唱）、懸田克躬（順天堂大学理事長もした精神医学者）、竹村堅次（昭和大学教授）、阿部知子（国会議員、小児科医）、柴田洋子（東邦大学教授）、大谷藤郎（ライシャワ大使刺傷事件当時厚生省公衆衛生局精神衛生課技官、医務局長、らい予防法廃止を提唱）、佐藤壹三（千葉大学教授）、小峯和茂（小峰研究所）、町泉寿郎（二松学舎教授、精神科医療史研究会をう

けつぐ青柿舎の勉強会での講師)。

松沢病院での先輩だった藤原豪さんが、都の保健衛生大学の教授を定年退職するときに“精神科臨床50年”の会を上野・本牧亭でやったときに、新海安彦(信州大学助教授)、廣瀬勝也(開業)、岡田敬藏(松沢病院長)、立津政順(熊本大学教授)、藤原豪。

その他精神科関係で、宮崎千代(クリスチャンで戦争中教授内村祐之にうとまれた、夫世民は中国の孫文を援助した滔天の甥)、西丸四方(信州大学教授)、湯浅修一(群馬病院長、原田憲一さんとともに岡田を講演にまねいた)、原田憲一(東京大学教授、岡田より1年上)、小関弘子(精神科の初代教授榊俣の孫、母がはやくなくなって、森茉莉が1年間父の後妻としてきたが、森は家事能力のほとんどない人だったという)、豊倉康夫(東京大学教授、神経内科初代)、加藤正明(精神衛生研究所所長、東京医科大学教授、岡田が兄貴分としていた)、松下正明(東京大学教授、原田さんのつぎ)。

來住彌次郎(精神科医で、東京帝国大学柳島セツルメントの誕生から解散までにかかわった)の関係で、滋賀秀僕(東京帝国大学医学部社会医学研究会会員)、曾田一枝(社会医学研究会会員で医務局長もした曾田長宗氏の夫人)、宮城二三子(來住がつとめた巣鴨保養院での同僚)、宮城音彌(心理学者、二三子さん夫)。

日本医史学会のシンポジウム、特別例会のあとで、山下政三(本会員、脚気研究)、松木明知(弘前大学教授、森鷗外研究)、山崎光夫(本会員、作家、森鷗外研究)、坂井建雄(順天堂大学教授、本会編集委員長)、川瀬清(日本薬史学会)、小曾戸洋(北里大学東洋医学総会研究所部長)、荒井保男(本会員、森鷗外研究)、篠田達明(本会員、作家)。

旧ソヴェト医学研究会、条件反射研究の関係で、柘植秀臣(法政大学教授[生物学]、仙台時代に小川先生および中国の天才の神経学者陶烈と

一緒だった、民主主義科学者協会の幹事長、副会長としてソヴェトおよび中国との学術交流に尽力していた)、水上茂樹(東京大学ソヴェト医学研究会、九州大学教授[生化学])、川村浩(東京大学ソヴェト医学研究会、横浜市立医科大学助教授[生理学])、上田敏(東京大学ソヴェト医学研究会、東京大学教授[リハビリテーション部、初代])、小木和孝(東京大学ソヴェト医学研究会、労働科学研究所所長)、高木隆郎(京都大学ソヴェト医学研究会、京都大学助教授[児童精神医学])。

郭沫若さん関係(郭さんは1955年中国科学視察団をひきいて来日、柘植さんの推薦だろう、その送別宴に岡田もまねかれた、翌年柘植さんが中国へいくときに、郭さんへのちいさなお土産を托したところ、郭さんからすぐに立派な礼状がきた、この手紙も番外としていれた)では、郭さんの手紙があると本会員の郭秀梅さんにはなしたところ、郭さんが郭沫若さん外孫の藤田梨那さん(国士舘大学教授[中国文学])をつれてこられて、藤田梨那、郭秀梅。

島田事件(1954年静岡県島田市で幼稚園児がつれさられ、ころされた)の関係で、赤堀政夫さん(犯人とされて、ほぼ30年間死刑囚としてすごしたのち再審無罪)、森源(島田市で赤堀さん救援運動の中心)。

呉茂一・呉章二家から医学文化館に寄託されていた呉秀三先生遺品が、医学文化館廃館後に岡田の口利きで東京大学医学図書館に寄贈されることになって、呉忠士、呉秀男(章二氏息)、大江和彦(東京大学医学図書館長)。

こうしてみると、これらはわたしがやってきた仕事の一側面でもある。そして、署名帖4冊は貴重な文化財にもなっている(学士院会員3名の署名もいただいている)。これまでお話しをきかせてくださった方がたにあつくお礼をもうしあげたい。

(平成24年1月例会)